



オケの テイキは、 おもしろい レポート

・2016年4月東京定期版《惑う惑星》・

今日、ここに集まった私たちにしかない音楽

山口敦

「オケのテイキは、おもしろい」とは？

オーケストラの定期演奏会のプログラムをもっと深く楽しむためのワークショップ・シリーズ。2014年からスタートし、今回は7回目となります。

「多くの音楽は、実は案外シンプルなアイデアの組み合わせでできています。大きなビルも、小さなブロックを組み立てることでできているのと同じように。」

マイクの音楽創造ワークショップは、題材となる楽曲について、その曲を特徴づける「要素」を切り出すことで構築されています。ここでいう「要素」というのは、例えば音の動き、すなわちメロディラインであったり、和声の動き、あるいはリズムのパターン、音色などの特徴を指しています。

定期公演を聴くのに先だって、その曲の特徴を身を持って体感し、作曲家がどういうプロ

セスでその曲を組み立てたか？ということを追体験する。すると、コンサートで聴くとき、楽曲のテクスチャや構造が浮かび上がり、手にとるように曲のキャラクターが見えてきたりします。

そんな狙いをこめた「オケのテイキは、おもしろい」。今回のお題はホルストの組曲『惑星』から《火星》。マイクはこの曲をどう料理し、私たちはそれをどう味わえるのでしょうか？

■ キーワードは5拍子

日本フィルのメンバー6人によるアンサンブルが音楽を奏でます。聴いたことのある曲を、でもちょっと違う感じで。チャイコフスキーの交響曲第6番『悲愴』の第2楽章をまずは2拍子で！参加者がこの演奏に合わせたステップで室内を歩きます。次に同じ曲を3拍子で。「どうですか？歩きにくいですね。3拍子に合わせるには特別なダンスが必要です」マイクが手本を示すワルツのステップに倣い、舞踏会が始まりました。

そして「悲愴」2楽章の本来の姿の演奏。これは「2」+「3」の5拍子ですが、それに続けて、みんなでまたちょっと体を動かしてみました。クラップ(手拍子)で3拍、そしてステップ(足踏み)で2拍。さて、この「3」+「2」の5拍子のリズムがみんなの体に入ったところで、話はいよいよホルストの《火星》へ。そう、この曲をご存知の方ならニヤリとする。あの5拍子です。

■ 戦争が近づいてくる

星座図を眺めるのが好きだった、というホルストは、占星術やギリシャ・ローマ神話と星との関係に興味をもって「惑星」を書いたといわれています。じっさい、組曲の各曲にはこれらのなかにあるキーワードが副題として付けられています。《火星》のキーワードは「戦いをもたらす者」。

参加者は3つのグループに分かれ、いよいよ音楽ワークショップの開始。《火星》の音楽の本質に、3つのルートから私たちはアプローチを始めます。

特徴ある「3」+「2」の5拍子。マイクは「共通するルール」と呼び、3グループともまずこのリズムパターンを基本として共有します。そしてさらにマイクは3つのグループに、《火星》が持つ特徴的な要素として次のようなものを振り分けました。

■グループ1は『オクターブ+半音の大きな跳躍と半音下降を繰り返す音形』、またグループ2は『和音の幅を保ったまま半音階的に平行移動する音形』。この2グループに共通するのは、戦場そのものの光景というよりも、「戦争が近づいている、という不安」を表現する音形です。この気配が、《火星》の音楽が描く風景のバックグラウンドなのだ、と、改めて思い出します。

■ 「平和」でしめくくり

さて、ワークショップの時間も終わりに近づきました。「やはり戦争ではなくて平和で終わりたいですね？」という訳で、再び3グループに分かれ、今度は《金星》に挑戦。



トーンチャイムの暖かい余韻は、《金星》のイメージによく合う。「ボンくん」と伊波睦(トロンボーン)の指導のもと、短い時間ながら楽員と受講者が一緒にアンサンブルをつくる。



グループ1は「てっちゃん」こと大澤哲弥(チェロ)がファシリテーター。ピアノ、木琴、打楽器を使い、「5拍子のリズム」と「大きく跳躍する音程」という要素をもとに、自分たちならではの音楽を創った。

■そしてホルストがこの曲で描いたもうひとつの風景がグループ3のテーマ、すなわち「ファンファーレのフレーズによるカノン」。レクイエムの「Dies Irae(怒りの日)」にある最後の審判のようなラッパの交わり合い、そして「敵と味方が対峙する」という構図がここにはある、とマイクはヒントをくれました。

各グループとも、日本フィルの楽員がリーダー役を果たしながら、約1時間かけてこれらの音楽的要素を題材に、それぞれの音楽をつくっていきます。そして成果の発表。グループ1、2、3の順につなげて演奏します。《火星》の音楽はA-B-Aという3部分から構成されており、3グループが連続して演奏することで、《火星》が持つ要素と構成をベースとした、もうひとつの《火星》が生まれた訳です。

参加者たちは思い思いの楽器を手に取り、「平和をもたらす者」にふさわしい、安らぎ、静けさ、優しい光に満ちた光景を、音色やリズムパターンで表現し、楽員が演奏する室内楽版の《金星》に合わせ、合奏に参加しました。

マイクはこう締めくくりました。「毎回のワークショップが、このような手づくりです。《火星》の音素材をもとにした今日のメンバーならではの創作、そして《金星》の合奏。どちらも、今日、この場所に集まった私たちにしかできない音楽ではありませんか？」

※ワークショップの募集はfacebook (facebook.co./jpo.wsc) やツイッター (@japanphil) でも発信いたします。